異世界で蛇王子達と産卵溺愛の日々を送ることになりました♡

大和ソウ

【登場人物】

・茅野　渚（ナギサ）
　無類の爬虫類が好き。趣味は爬虫類カフェに行くこと。
　とあることがきっかけで蛇族の国サンドルードに飛ばされる。

・第一王子・シャマル
　金髪碧眼。
　真面目な性格だが、羽目を外すこともある。

・第二王子・アグニ
　黒髪赤眼。
　兄弟の中では一番強気な性格だが、親しみやすく愛想がいい。

・第三王子・アルル
　白髪白眼。
　人間界で彷徨う中、ナギサに助けられた蛇。
　物腰柔らかい性格。
　自分を助けてくれた主人公を慕う。

「ぜーったいに嫌っ！　そんなところ一人で行って！」
耳元で大きな声が聞こえたあと、プツン！　と電話が切れた。
「えっ、友美！　ちょっと！　あ……あーあ、やっぱり駄目かぁ……」
がっかりしながらスマホを鞄にしまう。またしても友達に断られた。慣れっこだけど、寂しいものは寂しい。
――――仕方ないな。一人で行こう。
私は荷物を手に家を出た。
向かった先はいつも買い物に行くお店――――じゃなくて、そのすぐそばにある雑居ビルの三階。
意気揚々とした足取りで階段を上がり、小さな扉を潜ると、独特の匂いが鼻の奥に吸い込まれる。
いらっしゃいませと声を掛けてきた店員さんに、笑顔で挨拶した。

「茅野さん！　こんにちは。先週ぶりですね」
「はい！　また来ちゃいました」
「ジョナサンくん待ってますよ」
消毒を済ませ、入店手続きを終わらせた後店の奥に入った。
ここは爬虫類カフェだ。カメやヘビ、カメレオン、イグアナなんかの爬虫類全般を取り扱っている。
お店の中で爬虫類に触ることも出来るし、制限はあるけど飲食もオーケー。気に入った子を購入することも出来る。
何を隠そう、私は大の爬虫類好きだ。一番好きなのは蛇だけど、基本はなんでも好きだ。
そういうわけで、このショップにはかなり頻繁にお邪魔している。
「ジョナサン〜！　元気してた〜？」

ガラスケースの中にいる蛇に話し掛ける。蛇は私の言葉なんて分からない。のろのろ動くだけだ。

――――ああ、なんて可愛いの♡ この可愛い目！　柔らかい肌触り！　チロチロした舌！　最高！

私の爬虫類好きは昔からだ。とある動物のテレビ番組を見てから、爬虫類が好きになった。

もちろん飼いたいと思ったこともある。けれど現実はそう甘くない。蛇を飼いたいと言った私に、家族は大反対。噛まれたらどうするんだとか、逃げ出したらどうするんだとか散々言われ、実家で飼うことは諦めた。

今は一人暮らしだけどマンションでペットを飼うことは禁止されている。

もちろん黙って飼うこともできるけど、いざ何かあったときのことを考えるとリスクが高すぎて出来なかった。

そういうわけで私はひたすら店に通うしかない。
「茅野さんはほんとにジョナサンが好きですね」
「そうなんですよ。ジョナサンが一番推しです。飼えるなら飼いたいんですけどね……」
この世界は爬虫類にあまり優しくない。逃げ出せは散々ニュースで叩かれ、危険な生き物扱い。さっきも友達を誘ったけど、怖いだとか噛まれるだとか言われて結局誰も一緒に来てくれない。
――本当はかわいいのになぁ……。
結局この日も私は一人で数時間堪能した。
――――はぁ、蛇好きってそんなに変かなぁ。

お店は楽しかったし、爬虫類はみんな可愛かったけどなんとなく気分が重い。友達にめちゃくちゃ嫌がられたからだろうか。

友達に言っても男の子に言ってもみんな怖がって近寄ろうとしない。というか私が変人扱いされている。そのせいかどうかわからないけど彼氏もできない。

いっそ人間なんかやめて爬虫類に生まれたかった。

駅前で買い物をして、夕方ごろ家に帰路についた。あと少しで自宅のマンションにたどり着くところで、道端に白い紐のようなものが見えた。

――――なんだろう？

そう思って近づく。それは小さく細い蛇だった。

「わぁ、蛇！」

私は思わず興奮した。

白い蛇は見たことがある。野生の蛇だろうか。それともどこかで飼われていたものが逃げ出したのか。

つい近づきたくなるけど、もしかしたら警戒されるかもしれないと思い、ゆっくりと歩み寄る。

「どうしたの？　なんでこんなところにいるの？」

当然、蛇は答えない。この色だと野生じゃない。飼われていた蛇なら餌を与えられていたはずだ。なんだか衰弱しているように見える。

――――どうしよう。このまま放っておいたら死んでしまうかもしれない。でも家に連れて帰るわけにもいかないし……。

私はそうだ、と思いついた。さっきスーパーで買った鶏肉のパックを取り出して、表面のラップをちぎって中の鶏肉をひとかけら取り出す。それを小さくちぎって蛇の前に置いた。

「食べれる？　ちょっと多すぎるかな？」
蛇は少し窺うように眺めていたけど、ゆっくりと口を開けると鶏肉にかぶりついた。
「お腹すいてたんだね。いっぱい食べていいよ」
私は蛇が鶏肉を丸呑みしたのを見てもうひとかけら蛇の前に置いた。蛇はその鶏肉も丸呑みした。よほどお腹が空いていたんだろう。
「よく食べるね。君はどこから来たの」
保健所に届けるべきだろうか。でも飼い主が見つからなかったら殺されてしまうかもしれない。どうしようと思ったところで蛇がするすると動き始めた。
「あ――――ちょっと！　そっちはっ……」

蛇が道路に飛び出す。しかも運が悪いことに向こうから車が来ていた。私はとっさに蛇を追いかけて道路に飛び出した。激しいクラクションが鳴って、頭に死の文字が浮かぶ。

――――ああ、私死ぬんだ。

そう思ったところで意識が途切れた。

◆

「う……」

鈍い痛みに目を覚ます。なんだか顔に当たっている。くすぐったくて痒い。

ふと、自分が地べたに倒れていることに気が付いた。

「え……」

周りは木々に覆われていた。地面は土。草が茂り、見たこともない草や花が咲いている。

おかしい。さっきまで家の近所にいたはずなのに。というか私は車に轢かれたはずだ。

ここはどこだろう。家の近所にこんな山みたいな場所があっただろうか。見覚えがない。

森――――というか、ジャングルみたいだ。大きな木々は日本で見ないような形状をしている。聞いたことのない動物の声が聞こえた。しかも暑い。

ふと周りを探す。持っていたはずのカバンがない。スマホもない。買ってきた荷物も。どこかに落としたのだろうか。

「どうしよう……」

その時だった。森の奥から、がさっと音がした。茂みの中から出てきたのは、人間――――のような生き物？　男の人？

「見つけたぞ！　人間だ！」

槍を持った男は そう叫ぶ。

奇妙な格好した男だった。まるで中東の国のようなカラフルな衣装。日本では見たことがない。けど、それよりも目の前の人物の顔の方に驚いた。

顔は人間だ。でも目はまるで爬虫類のように黄色く、半月型の黒目がキョロキョロと動く。肌は蛇の鱗のような模様が全身に巡らされていた。まるで蛇人間だ。

けれど、私がじっと見つめる間もなく、茂みの奥から次々と似たような生物が現れた。

「この者か……っ！」

「きゃあっ」
瞬く間に囲まれ、私は身動きが取れなくなってしまった。
――――この人達は誰!?　まさか私を殺す気じゃ……。
「さ！　異邦人様！　こちらへどうぞ！」
そう言って蛇人間がざっと波を割ったように左右に広がる。その先にあるのは、お神輿のような物体だ。
「……え？」
「こちらへどうぞ！　王宮までお連れします！」
な、なに？　なんで？　王宮？
けれど槍を持った相手に尋ねることなんてできない。私はただ恐怖に怯え、従うしかなかった。

連れて行かれた場所は先ほどいたジャングルとは違う場所だった。アラブの王宮と見紛うほどの立派な宮殿は明らかにここが日本でないことを教えてくれた。

白亜の宮殿の前には大きな噴水があり、ヤシの木に似た植物が等間隔に植えられている。そして、その中に御神輿のような物体に乗せられて連行される私。

ここはどこなんだろう。まさかインドとかじゃないよね……？

言葉は通じるみたいだから、日本なはず。だけどこの宮殿は明らかに日本じゃない。

やがて、私は王宮のような建物の中に通された。

そのまま奥へ奥へと進み、絨毯の敷かれた長い廊下を抜けた後、天井の高い部屋に通された。

目の前に聳える大階段。その上に座る三人の男。いずれも服装はエスニック系のカラフルで華やかな衣装。背が高く、まるで王子様のような美貌。

――――だけど、肌にはヘビの鱗のような模様がある。
「この娘か」
壇上にいる一人の男が尋ねる。金色の髪。赤色の華やかな衣装を着ていて、堀の深い端正な顔立ちをしている。
「はっ！　ジャンドゥーの森にいるところを発見いたしました！」
私を連れてきた蛇人間が答えた。
「なるほど、確かにサンドルードの民ではないな。古文書に載っている容姿と酷似している。この娘で間違いないだろう。まったく……アルル、お前のせいでこのようなことになったのだぞ」
「申し訳ありません、兄上」
それに答えたのは白髪の美青年。兄上、と言っているから金髪の男の弟なのだろうか。

「兄者、異邦人は一人しかいないぞ。どうするのだ」
次に尋ねたのは黒髪の男。褐色の肌に黒と金の衣装が似合っている。
三人は兄弟のようだ。いずれも容姿が美しく、蛇肌だ。
――――異邦人？　この人達何を言ってるの……？
すると、壇上にいる白髪の青年、アルルと目が合った。
「兄上、まずは、異邦人様にご説明するのはいかがでしょう。状況を理解していただかなければ話が進みません」
「それもそうだな。そなた、名前は何というのだ」
黒髪の男が私に尋ねる。
「茅野（かやの）……渚（なぎさ）です」
「カヤノナギサか。変わった名だな。ここはサンドルード。我々蛇族が治める国だ」

「蛇族……？」
私が頭に疑問符を浮かべると、アルルが二人の兄に横から耳打ちした。
「兄上、異邦人様の世界には我々のような生き物はいないのです。全て説明しなければ」
「む……そこからか。仕方あるまい」
「僕が説明します。人間の国に行っていたのは僕ですから」
「では、任せよう」
「ナギサ……だったね。突然知らない場所に連れてこられて驚いていると思うけど、僕らの話を聞いて欲しいんだ」
アルルは穏やかな口調で話し始める。この人なら、なんとか話が通じそうだ。
「あ、あの。ここは日本じゃないんですか……？」

「違うよ。ここは君がいた世界じゃない。僕らの世界ではそれぞれを異世界って呼んでる」
「……異世界？」
異世界ってあの？　ファンタジーとかに出てくるやつ？
「そう。なぜ君がここに呼ばれたかだけど……今こっちの世界で大変なことが起こっているんだ。それで君に助けてもらいたくて、ここに来てもらった」
なんだか漫画みたいな展開だ。さっぱり理解できないけど、とりあえず話を聞いてみよう。
「何があったんですか？」
「僕らの世界には魔女と呼ばれる存在がいる。君たちの国でいう、神様みたいな存在だ。魔女は世界の全てを司る。けど、その魔女が世界に呪いをかけた」
「呪い……？」

「子供が生まれない呪いさ。その呪いのせいで僕らは同族同士で子供が作れなくなった。国は混乱している。僕ら王族はそれに対応しなければならない」

――――え、王族……？

確かにここは王宮みたいな雰囲気だけど。まさか彼らは王族なのだろうか。あんな高い場所にいるのだからきっとそうだろう。けど突然王族に呼ばれるなんて、。

ううん、というかそもそも異世界とか魔女とか言われてもさっぱり理解できない。

私はポカンとしたままアルルの説明を聞いた。

「僕らは国を救うため昔の文献を元に、異世界へ異邦人――――僕らの世界にいない人間を迎えに行くことにした。そこで君を見つけたんだ」

「私……？」

「うん。その節はありがとう。君のおかげで命拾いしたよ」

「え？　私別に何も……」
「食べ物を分けてくれたよね？」
「食べ物？」
そんなことしただろうか。白蛇に鶏肉をあげたりはしたけど……まさか。
よく見れば、アルルは白蛇によく似ている。アルルはにっこりと笑った。
「どの人間がいいかかなり迷っていたんだ。人間は蛇を見ると皆逃げ出してしまってね。でも、君は蛇の僕にも優しかった。君なら僕らを助けてくれると思ったんだ」
「でも、私は事故に遭ったはずじゃ……」
「うん……あれは、不可抗力だね。僕も予想外だったんだ。君が死にそうになって、咄嗟に力を使ってこちらに飛ばしたんだけど……着地地点を間違えて、君はジャンドゥーの森に着いてしまったらしい。手荒な真似をしてごめんよ」

「はあ……」

つまり私は白蛇に恩返しならぬ仇返しされてしまったのだろうか。

よく分からないけど、車に轢かれず済んだのは彼のおかげらしい。生きていてよかったのか、よく分からない。

「それで、話は戻るけど……君に協力して欲しいんだ」

「何を……すればいいんですか？」

「僕らの子供を産んで欲しいんだ」

「……え？」

「さっきも言った通り、数年前から国は魔女の呪いで子供が出来ない。このままでは蛇族は死に絶えるだろう。でも異世界から来た君は別だ。生殖能力がある。だから――――」

「ちょ……ちょっと待ってください！　そんな、いきなり連れてこられて子供を産めなんて、無茶苦茶すぎます！」
黙って聞いていたけど冗談にも程がある。大体、私はまだ結婚もしてない。王家だかなんだか知らないけど、言っていい冗談と悪い冗談がある。
「おい、滅茶苦茶嫌がられてるぞ」
悠長な様子で黒髪の男が言う。
「笑い事ではない。ナギサ、と言ったな。では、何をすれば受け入れてもらえるのだ？」
金髪の男が問う。
「え？」
「子供を産む代わりの条件だ。我々が叶えられることならできる限りのことをしよう」

「え、えっと……元いた場所に戻してください」
「それは無理だ。魔法陣は何度も発動できない。何百年もの魔力を貯めてようやく異世界へ行けるのだ。そなたが元の世界へ戻ることは不可能だろう」
「そんな……」
じゃあ、ずっとここにいないといけないの？　友達にも親にも会えないの？　これが夢だったらいいのに……。
「兄上、異邦人様はこちらへ来たばかり。少し休んでいただいて、我が国のことを知ってもらうのがいいかと。来て突然あれこれ要求するのは無礼です」
「うむ……確かにそうだな。分かった。ナギサよ、先程の話はまた今度しよう。長旅で疲れただろうから部屋を用意させる。そこでゆっくり休んでくれ」
私は呆然としたまま、また別の部屋へ案内された。

青と白を基調に作られた部屋はアジアン風でとても綺麗だったけれど、はしゃぐような気持ちになれない。

ここがどこかも分からない。異世界なんて、本当にあるんだろうか。けど、あんな蛇みたいな肌の人間がこの世にいるとは思えないし……。

座っていると、不意にノックされた。扉が開くと、先程の白髪の青年、アルルが姿を表す。

「やあ」

「あ……」

「フルーツと飲み物を持ってきたよ。どうかな」

食欲はないけど、一人で悩んでいたくなくて頷いた。アルルは柔らかい雰囲気だし、まだ話しやすい。相談すれば聞いてもらえるかもしれない。

アルルが合図すると、後ろからフルーツの盛り籠や茶器らしきものを使用人の女性が運び入れる。あっという間にテーブルの上が食べ物だらけになった。
「休んでいるところ悪いね。少し話がしたいんだけど、構わないかな」
「はい」
アルルは私の前に腰掛けた。
「どうぞ、食べて。この国で採れたものだよ」
「……ごめんなさい。あんまり食欲なくて……」
「……そうだね。君は望んで来たわけじゃないから、辛いことだと思う」
「あの……さっきの話は本当なんですか。呪いとか異邦人とか、正直分かりません。聞いたことないことばかりで……」
「本当だよ。魔女の呪いで世界中どの国もこんな状態さ。皆異邦人に頼るしかないんだ」

「異邦人って……」
「異世界から招かれた人間のこと。つまり、君だよ」
「あの、思ったんですけど、魔女の呪いのせいでこうなったんだったら、呪いを解くとかしてどうにか出来ないんですか？　それか魔女を倒すとか……」
「それは無理だよ。言ったように魔女は僕らの世界の神様なんだ。逆らえない。それに、魔女も必ずしも悪いことをしているわけじゃないんだ」
「どうしてですか？　みんな困っているんですよね」
「この世界には、蛇族以外にもたくさんの種族が暮らしてる。獣人族や鳥族、人魚族……大昔に人間と交わって誕生した動物人間達だ。僕らは人間よりも体が強くて長生きする。でも、欠点があるんだ」
「欠点？」

「君がいた世界もそうだけど、動物は一度に何匹も子供を産むだろう？　そうすると個体数がどんどん増えて、飽和状態になる。世界の均衡が崩れるんだ」

確かに、食べ物や資源は限りがある。生き物が増え続ければ……いつかは終わりが来る。

ということは、魔女はそれを防ぐために呪いをかけて生物の誕生を阻止しているってこと？

「でも、それで絶滅したら意味がないんじゃ……」

「だからそのための異邦人なんだ。僕たちはそれぞれに種族ごとに異邦人を招いて、子供を産んでもらう。そうやって何度も危機を乗り越えてきたんだよ。今回が初めてじゃない」

「でも……あの、あなたは蛇族、なんですよね。私は普通の人間なんですけど……子供なんて、産めるんですか？」

「もちろん。僕らは人間と動物が交わった存在だから。蛇族はかなり人間に近いだろう？　まあ、この見た目は違うけど……」
「はあ……分かりました。でも、いきなり子供を産むのはいくらなんでも無理です。その、気持ち的に……」
「うん……だから、まずはここの生活に慣れて。僕らは王族だ。君が生活に困るようなことはさせない。宮殿の中は自由に歩いて構わないし、行きたいなら街に出かけてもいい。君の自由と安全は保証するよ」
――――でも、その代わりに子供を産んで欲しい、と。
いい条件なんだか悪い条件なんだか分からない。王族の保護下ならいい暮らしができるんだろうけど、好きでもない人の子供を産むなんて……。
っていうか彼氏もいなくて爬虫類が恋人だった私にはかなりハードルが高い。

でも、断ったらここから放り出されるんだろうか。知らない場所で生きていける自信はないし、おまけにここは日本じゃないし、常識が通じないかもしれない。

「そんな不安そうな顔をしないで。君に危害を加えるつもりはない。君は大切なお客様だ。できるなら、この国を好きになって欲しい」

アルルの言葉に、未だ実感が湧かない。けれど一つだけわかる。私が受け入れないと何も変わらないってこと。

第二王子　アグニ

私は宮殿の一室――――青の間と呼ばれる部屋を与えられた。日本で暮らしていたワンルームより遥かに広い部屋だ。

大きな窓がついていて、バルコニーからは広い庭が見渡せる。部屋の中にはベッドや鏡、装飾品が置かれていて、まるで王様気分が味わえる。

今のところ、衣食住で困ったことは何もない。あれ以来王族のあの三人とは会っていないし、部屋に来るのは召使いだけ。

しばらく一人で過ごしているうちに、私は冷静になっていた。

ここにきた時は混乱して頭が回らなかったけど、アルル……いや、第三王子アルル様の言った話も、少しずつ受け入れ始めている。

――――ここは夢の中じゃない。本当に異世界なんだ。

スマホもテレビもない。動物と人間の異種交配によって誕生した種族の暮らす国。

最初は絶望ばかりだったけど、考えようによっては悪いことではないかもしれない。働かなくていいわけだし、こんないい部屋に住めて、お金と時間の自由がある。

そもそも私は爬虫類が好きだし、蛇は特に好きだ。むしろ、滅茶苦茶いい条件なのでは？　と思った。

でも……子供を産まないといけないっていうのが難点なんだよね。私処女だし。なんだったら彼氏もいないし。そんな私にいきなり子供を産めなんて。

っていうか、相手は誰なんだろう。国民全員とえっちしないといけないとか？

それは嫌だ。

その辺りのことはあまり突っ込んで聞かなかった。あの時は考えられなかったし、余裕もなかったから……。

部屋で過ごすのにも飽きてきた。少し、外に出てみようか。

部屋の外に出ると、召使いの女性に出くわした。この宮殿で働く蛇族の女性だ。

「これは……ナギサ様。どちらへ？」

女性はスッと膝を折って頭を下げる。

「えっと、少し外に行きたいんですが……いいでしょうか？」

「かしこまりました。護衛の者を呼んで参りますので、少々お待ちくださいませ」

少しの間待っていると、王宮で見かける騎士を連れて戻ってきた。

「ナギサ様は人間ですので、こちらで顔を隠してくださいませ。顔を知らないとはいえ、民衆も異邦人の存在を知っておりますから」

そう言って布を手渡される。
「ありがとうございます。忙しいのにすみません」
「滅相もございません。異邦人様のお世話は大変名誉なことです」
王宮の召使い、騎士達は基本的にこんな態度だ。一人だけ人間で差別されるかとも思ったけど、意外にも歓迎されている。この国において、「異邦人」の存在が特別だからかもしれない。国の危機を救うことのできる唯一の人間――――。
王宮から出ようとしたところで、こちらに向かって歩いてくる人物が見えた。
アグニ様は私を見るなり大きく手を振った。
「ナギサ！　どこへ行くんだ？」
「アグニ様……あの、街に行こうかと」
「そうか。なら俺が案内しよう」
「えっ」

「ちょうど手が空いたところだ。お前らはいい。行くぞ」
アグニ様は騎士と召使いにそう言うと、スタスタと正門に向かって歩き始めた。
せっかく誘ってくれているんだし、お願いしよう。私はアグニ様の後をついて行った。
サンドルードの王都は賑やかだった。近代的ではないけれど、人々は楽しく暮らしているように見える。蛇族というだけあって、皆肌は蛇のような模様だ。だけど色とりどりで、蛇の博物館を見ているような気分だ。
爬虫類カフェに通っていた私としては、割と楽しい風景だ。本物の蛇がいないことが残念だけど、思っていたより馴染みやすい。
「ナギサは蛇族を見たことがあるのか？」
私がまじまじ眺めていたことが気になったのか、アグニ様が尋ねた。
「あ、いえ。初めてです」

「それにしてはあまり怖がらないな」
「蛇、好きなんです。私がいた国ではあまりメジャーじゃなかったんですけど、飼っている人もいました」
「そうか。蛇族は毒持ちがいるから多種族からは嫌煙されているんだが、そうであれば安心だ」
「毒を持ってる人がいるんですか？」
「ああ。蛇族は毒を持つ者ほど高い地位にある。王族は皆毒持ちだぞ」
思わずゾッとした。いくら蛇好きでも毒持ちの蛇に噛まれるのは怖い。私が顔を引き攣らせていたのが分かったのか、アグニ様ははっと笑った。
「大丈夫だ。王族とはいえ、異邦人に危害を加えることはあり得ない。それに毒と言っても、ほとんど殺傷能力はない」
「そうなんですか？」

「大昔は違ったんだがな、国ができて、こうして平和な時代が続いたおかげだろう。他者を害すような毒の機能は年月とともに退化してしまったと聞いている」

蛇なのに毒がない……。安心したけど、油断はできない。ここは蛇の国。私は人間。何が起こるか分からない。

それから街を歩いた。買い食いしたり、綺麗な場所に連れて行ってもらったりして街を堪能した。

異世界に飛ばされたのに、なんだか観光に来たみたいな気分だ。

もしこれが本当に観光だったらよかったのに。変なお願い以外は最高だ。このままずっとここで暮らしてもいいと思える。

「あの、アグニ様……国民の皆さんはご存知なんですか？　魔女の呪いのこと……」

「もちろんだ。国民は皆知っているぞ。世界全体の問題だからな」

「他の国も異邦人を呼んでるんですか？」
「そうだろう。とはいえ、他国の異邦人の情報はほとんど入って来ないからどんな人間が招かれているか分からんがな」
他国にも人間がいる……。その人達も同じような待遇で子供産めとか言われているんだろうか。
普通に考えたらあり得ない。でもここは異世界。そうするしかないと言われたら……。
「……もし、私が子供を産むってなったら、みんなの相手をしないといけないんでしょうか」
「ん？　みんなとはどういう意味だ？」
「その……この国の人たち、みんなです」
私がモゴモゴ口言うと、アグニ様は驚いたように言った。

「あり得ない！　古来から、異邦人の相手は王家の者がすると決まっている。平民が触れることは一切ない」
「……え？　そうなんですか？」
「異邦人に関することは王家が主体となって進めるんだ。俺達兄弟でな」
アルル様以外あれ以来まともに話をしていないけど、実は色々気を回してくれていたらしい。
「そういえば、王様はいないんですか？」
そういえば、ここにきてから王様に会っていない。あまり気にしていなかったけど、王子がいるなら王様と王妃様もいるはずだ。
「父上は老齢のため、隠居した。魔女の呪いが始まって……俺達に国を譲って、母上とともに離宮で暮らしている」
「そうだったんですか……」

「多種族と違って我々蛇族は人間との歴史が浅い。友好的な関係を築くのに非常に時間がかかる。それゆえに異邦人探しもうまくいかず、アルルは何年もかかってお前を探してきた。国民は日々不安を感じて暮らしている。だから、お前にはなんとしてでも俺達の子を産んでもらわねばならんのだ」

そ、そう言われましても……。

とても気の毒だとは思う。動物たちにとって子孫を残すことは一番大切なことだろうし、焦る気持ちも分かる。

で・も！　それを私に解決しろっていうのは……。

散策を終えた私達は王宮に戻った。

「どうだ。街は楽しかったか？」

「はい。とても楽しかったです」

「それは良かった。今度異邦人歓迎の祭りを催そうと思っている。国をあげての華やかな祭りだ。お前にも参加して――――」
「いえ、あの……っ十分歓迎してもらっていますから！　お気持ちだけで大丈夫です」
「なぜだ？　祝い事はみんなで楽しむものだぞ」
サンドルードはそういう風習なのかもしれない。でも私の頭にはここにきた時御神輿みたいなのに乗せられた記憶が蘇る。
まさかあんな感じで王都を練り歩いたりするんじゃないだろうか。恥ずかしすぎる。
「国民達は異邦人を歓迎している。何年もかかって見つけてきた異邦人だからな。国がこれほど賑わっているのは久しぶりなんだ」
「え……？」

前からあんなじゃなかったの？　でも確か、アルル様は異世界に飛んだけど異邦人探しに時間がかかったって言っていた。蛇好きな女の子なんてなかなかいないし……。

あの街の賑わいは、私が来たことへの喜びだったってことなのかな。

「そう、ですか……。すみません。勝手に口出しして」

「いや……。こちらこそ悪いな。アルルにも指摘された。お前と我々は育ってきた環境がかなり違うようだ。できるだけ合わせようとは思っているが……」

アグニ様は思っていたよりもいい人みたいだ。ちょっと強引なところがあるけど、悪い人じゃない。これなら仲良くなれそうだ。

でも、アグニ様といいアルル様といい、みんなすっごい美形なんだよね……。

こんな綺麗な人の相手なんて、私で務まるのかな。いや、っていうかまだえっちするわけじゃないけど！　でもこんなに格好よかったらちょっとはいいかも……。

でも王子は三人いるけど、誰が私の相手になるんだろう？　一番偉い感じがするのが第一王子のシャマル様だから、やっぱりそうなのかな。

その辺りの話をもう少し突っ込んで聞きたいけど……「私の相手って誰なんですか？」なんて聞けないし……。

「そうそう、子作りのことだがな」

「えっ⁉」

もしかして私の頭の中読んだ⁉　いや、そんなわけないか……。

「兄者は国政で忙しい。一番初めの相手は俺に譲るそうだ」

「……一番初めの相手？」

「まあ、順当にいけば兄者の次に俺で、その次にアルルなんだが……父上が隠居されてから兄者も忙しくなってな。お前にべったりというわけにもいかないんだ。とりあえず俺の子供を産み終われば兄者になるだろ――――」

「ちょ、……え!? ま、待ってください。アグニ様が終わったらって……私、三人全員の子供を産むってことですか……？」

「そうだぞ？」

――――それは聞いてない。てっきり一人だけだと思っていた。

っていうか、三人の王子の子供を産んだら跡目争いとかどうなるんだろう。とんでもないことにならないんだろうか。いや、それ以前に。そんなに次々と子供産まされたら私の体力……。

「ああ、出産が心配か？　王宮には専門の助産師がいるから安心しろ。母上もスルッと産んだと聞いている」

「え、いや……そうじゃなくてですね……」

サンドルードはインドっぽい国だけど、もしかして一妻多夫制なんだろうか。じゃないとこんなことしないはずだ。

「あのー……殿下達には、その、決まった女性のお相手はいらっしゃらないんですか……？」

「んー、いたにはいたが、国の大事だからな。そういう時はやはり優先順位も変わる。国が一番大事だからな」

ええー……ってことは私、その人の立場を奪っちゃったことになるんじゃ……。

色々不安すぎる。というか、三人の王子の子供を生まされる私の立場って一体……？

「どうした？　顔色が悪いぞ」

「い、いえ……後継者がいっぱいいたら後々大変なことにならないかな、と」

「普段ならそうだが、今は有事だ。数百年前の異邦人の時は生まれた子供達は臣下として特別な身分を与えそうだから、今回もそのようにしようという話になってい

る。我々の子供だけ産んでも国が助からないからな。子供達に国民のことを任せるつもりだ。その中で特別優秀なものが次の王へ選ばれるだろう」

「はぁ……」

「そういうわけで、お前の相手は俺だ。近々閨(ねや)に呼ぶことになるだろう。またその時になったら使いをやる」

アグニ様はそう言うと颯爽と去っていった。

――――ええ……全然納得してないんですけど。

私の決定権とかないんだろうか。相手が王族だから仕方ない？　っていうか子供産むって……。

私は呆然としながらふらふら部屋に戻った。リフレッシュしようと思って外に出たのに、むしろ疲れた。

なんとか拒否する方法はないだろうか。でも、子供を産まないと私の立場がない。押しの強い王子達を言いくるめることなんて無理そうだ。

結局、誰にも尋ねられず、説得もできず、その夜がやってきてしまった。

私の部屋にやってきたアグニ様の召使いが淡々と告げる。

「本日、湯浴みの後アグニ殿下の寝室にいらっしゃるようにとのことです」

分かっていたとはいえ、まるで死刑宣告みたいだ。

アグニ様が嫌いとかじゃない。ただ、いきなり子作りしろなんて……きっと誰が聞いてもびっくりするだろう。

けれど拒否権なんてない。食事の後、丁寧に身を清められた私は、いかにもな下着を身につけさせられてアグニ様の寝室に連れて行かれた。

豪華な扉の前で立ち止まり、入ろうか入るまいかともだもだしていると、私の代わりに召使いがノックした。

「アグニ殿下。ナギサ様をお連れしました」

中から「入れ」と声がする。私は勇気を振り絞って扉を押した。

アグニ様の部屋は私と同じく豪華絢爛だ。赤と黒を基調にしたインテリアはムーディな雰囲気で、なんだかいやらしく見えてしまう。

アグニ様はソファに座って寛いでいた。

「来たか。待っていたぞ」

私がどうしようか戸惑っていると、ベッドに移り、縁に腰掛ける。こっちに来いということだろう。私はそろりそろりとベッドに近づいた。

大きなベッドだ。これぐらい大きいなら、どんなプレイをしてもいけそう……なんて冷静に考えている場合じゃない。

正真正銘の処女の私が、この難局をどうやって乗り切るか。
「そう緊張するな。俺は上手いと思うぞ」
「すみません……こういうの、初めてなんです……」
「気にするな。そもそも蛇族を相手にすること自体初めてだろう。無理もない。それはそうと、お前は蛇が平気なんだったな？」
「え？　あ、はい。蛇は好きです。元々の世界にいたときは、よく見に出かけていました」
「そうか。それなら安心だ。アルルの話では、お前の世界では皆蛇を怖がると言っていたから気掛かりだったんだ」
「そういう人も多いですけど……私は好きです。可愛いし、なんていうか、神秘的で。だから別にこの国の人は怖くありませんよ」
「それなら良い。最中、俺の体が少し変わっても驚くなよ」

「え……？」
体が不意に押し倒される。私はアグニ様を見上げる形になった。
「一番初めに俺に当たっておいて正解だったな」
「あ、あの……それは、どういう……？　んっ……」
アグニ様に突然キスをされた。驚いて戸惑う私の口の中に、なんだか細いものが入り込む。
――――これっ……蛇の舌だ……っ。
細い舌が私の中で動き回る。やがて、私の舌に何かちくっとしたものが当たった。
アグニ様は顔を離すと、蛇のような舌と牙を見せつけるように笑った。
「今お前の体に毒を入れた」
「えっ……」

「心配するな。死なない毒だ。すぐに身体中に回るだろう」
言った通り、私の身体がだんだんと熱くなり始める。さっきよりも動悸が早い。身体中がゾクゾクして、得体の知れない感覚がした。
「ア……アグニ様……体が……っ」
「蛇族の毒にはそれぞれ特性があってな」
褐色の指がつつ……と私の首筋をなぞる。明らかにただ触れただけとは違う感覚がした。
「あ……な、んで……っ」
「王家は子孫を残すためにそれ用に毒が特化している。俺の毒はなんの毒か、分かるか？」
アグニ様は薄い透け透けの下着をぺろんとめくる。私の胸が露出されて、思わず手で隠した。

「手で隠したら見れないだろ」
「こ……こんなの恥ずかしいです……」
「随分奥ゆかしいんだな。我が国の女は皆積極的なんだが……ま、これはこれでそそるな」
「や、やだ……っやめてっ！」
なんだか怖い。私はぎゅっと身体を縮こめた。
「こら、そんなんじゃ何もできないぞ？　仕方ないな……」
私は目を疑った。さっきまで私の上に馬乗りになっていたアグニ様の身体がどんどん縮む。やがて細長くなって、見る見る間に大蛇の姿に変わった。
黒い肌に赤い模様。毒々しい色合いの蛇は、いつも私が触っていたような小さいサイズではない。頭は私の顔ぐらいあるし、胴体は私の太ももぐらいある。

流石のこのサイズの蛇を目の前にして、平然としていられるほど私は蛇好きではなかった。好きは好きだけど、それよりも恐怖の方が優った。

私が硬直して動けずにいるとアグニ様だった蛇がするりと動き、私の身体にまとわりつく。身体をとぐろ状に巻き付くと、私の手を頭の上で縛るように胴体を絡めた。

「震えてるな……。悪い。やっぱり怖いんだろう」

聞こえてきた声はアグニ様と同じだ。身体は蛇だけど、中身は同じ。そう思えば、まだ少しは恐怖が和らいだ。

「怖がるな。お前をとって食ったりするつもりはない。俺に身を任せろ」

するするとアグニ様の身体が私の身体を上を這う。

「人間の肌は美しいな。俺達とは違うが……滑らかで、真っ白だ。多少体の作りは違うようだが……」

胴体が下着をめくりあげる。露出された胸の中心にアグニ様の顔が近付いて、真っ赤な舌がチロチロと触れた。
「ああっ……」
「綺麗なピンク色だ。こんな目立つ場所に……」
続け様に舌が私の胸の突起を舐める。くすぐったくて身体が震える。怖いはずなのに何故か快感の方が強く感じてしまう。
頭がぼうっとする。なんだか熱が身体中を覆ってるみたいだ。
「毒が回ってきたようだな。大丈夫だ、そのうち恐怖心など消える」
「んんっ……あ、だめぇ……っそこ……」
「人間は乳首が気持ちいいのか。見ろ、先程よりも硬くなったぞ」
「ああん……♡いやぁ、やだ、そこ、舐めないでぇ……っ」

怖いはずなのに、アグニ様が私に触れると気持ちいい。細い舌が乳首をくすぐるとゾクゾクする。

「ふん……いい顔だ。よっぽど乳首が気に入ったんだな。では、ここにも毒を入れてやる」

アグニ様の顔が近づいて大きな牙が私の乳房に突き立てられる。頬張るようにかぶりついた歯の先から、何か熱いものが注ぎ込まれた。

「あああああっ……♡」

「どうだ……？　どんどん敏感になってきただろう」

「あっ……ダメ……っなんか、へん……♡♡」

アグニ様の姿がスッと人間の姿に戻る。

「やはり、人間相手だとこちらの方が都合がいいな」

私に馬乗りになったまま、先ほど毒を注ぎ込まれた乳首を両方の手でキュッとつまみ上げた。
「あうっ♡」
「見ろ。興奮してすっかり硬くなっているぞ。いやらしい乳首だな。こんなあどけない色をしている癖に、カチカチに主張している」
キュッ、キュッ、と乳首を引っ張られる。痛いはずなのに気持ちいい。乳首の先っちょがジンジンして、股の間から何かが溢れてくる。
「んあっ♡だめ♡乳首引っ張らないで♡♡」
「気持ちいいんだろう？　こうされるとナギサの身体がびくびくと動くぞ」
「ああん♡嫌なのに♡なんで、気持ちいいっ♡♡」
「それは、ナギサが乳首を引っ張られるのが好きだからだ」
「ちがっ……♡そんなんじゃ、ないっ♡」

「違わないだろ。ここもこんなに濡れてるぞ」
アグニ様は私の股の間を見てニヤリと笑った。乳首を引っ張る手が離れたかと思うと、今度は下半身に顔を近付ける。
瞬間、何かを感じ取った私はぎゅっと股を閉じた。
「だ、だめ……っ！」
「閉じていたら交尾ができないぞ」
抵抗も虚しく、私の足はあっという間に開かされた。ガバッと左右に大きく開かれた脚の間には、誰にも見せたことのない場所がある。
「いやぁ……見ないでえっ」
「いやらしい性器だな。蛇族の雌のはもっとツルッとしているんだが……人間のは不思議な形をしている」
アグニ様は私の秘部を観察しているようだった。蛇人間とは作りが違うらしい。

けど、私はそれどころじゃない。無理矢理開かされたそこがぱくぱくと何か求めるみたいに動いて、余計に恥ずかしかった。
「人間の性器は毛が生えているんだな。ここも……このひだのようなものはなんだ？」
アグニ様は興味津々で私のあそこを手で広げる。
「ダメっ、広げないでぇ……っ」
「これはなんだ？」
つん、と私の秘部の上あたりに位置する小さな陰核に触れる。突然の刺激に驚いた身体が大きく震えた。
「〜〜〜〜〜っ♡」
「すごい反応だな。だが生憎、人間の女の体には詳しくなくてな。ここを触ると気持ちいいのか？」

「はうっ♡だめぇ♡そこ、ツンツンしないでっ♡♡」
アグニは子供みたいに私のクリトリスに触れる。私の反応がお気に召したのか、楽しそうに何度も突っついた。
――――ダメって言ってるのに♡♡そんなにされたら変になっちゃう♡♡
「我々のペニスとよく似ているが、違うな。こんなに小さくてはどこにも入らないぞ」
先ほど乳首を摘んだみたいに、きゅっとクリトリスを引っ張る。強烈な刺激に喉から変な声が漏れた。
「〝んあっ♡♡」
「ん？　ここも触ったら硬くなるのか」
再びクリトリスをキュッとつまみ上げる。堪りかねた私はまた嬌声をあげた。
「んあああっ♡♡だめええ♡♡」

「そうか、気持ちいいんだな。ならもっと触ってやろう」
きゅっ♡くにっ♡くにゅっ♡♡
「〝いいっ♡ダメ♡アグニ様♡♡クリトリス、敏感だからっ♡優しくして♡はうう♡」
私が必死で懇願してもアグニ様は全然やめてくれる気配がない。それどころか楽しんでいるみたいにクリトリスを引っ張り続ける。まるでおもちゃをいじる子供だ。
アグニ様のせいで私のクリトリスはすっかり腫れ上がっていた。ピンク色にテカテカと濡れて、つんと立ち上がって本当にペニスみたいだ。
「ナギサのペニスが大きくなったぞ。見てみろ、今にも射精しそうだ」
「あ、あああ……いやぁ……♡♡」

「ふむ……しかし、立派なペニスになったのに入れる場所がないな。仕方ない。俺が舐めてやろう」
「あ……」
アグニ様の唇がぱくん、と私のクリトリスを飲み込む。あまりの刺激に叫び声が上がった。
「ひゃあああっ♡♡」
「ちゅ……♡ぢゅる♡んぢゅ……っ♡♡」
「ああああ〜〜〜っ♡ダメ〜〜〜っ♡吸わないでぇっ♡気持ち良すぎるのぉ♡」
あまりの気持ちよさに私の腰がカクカク動く。細い舌でくすぐるように舐めながら唇でそっと包み込まれるとなんとも言えない快感が襲った。
アグニ様の唇が熱い。私のアソコがどんどんふやけてくるみたいで、思考が鈍る。

催淫――――アグニ様の毒の効果を、今更実感した。
ちゅ……と音を立てながら唇がようやく離れた。すっかり蕩け切った私のクリトリスはだらしなくへたっている。アグニ様に精気を吸い尽くされたみたいだ。
――――だめ……こんなにされたら、私のアソコ、アグニ様のおちんちんがすぐに入っちゃう……♡
「ふっ……見てみろ、ここがとろとろになっているぞ」
開かれたアソコを見つめられる。先ほどの行為のせいでふやけたアソコがぱっくりと開き、溢れた愛液で濡れそぼっていた。もういつでも入れていいと言わんばかりに。
「そろそろ入れてやろう。ナギサのここが俺のが欲しいとひくついているからな」
アグニ様は着ていたサテン生地のガウンを脱いだ。
「えっ……」

思わず驚く。私が見つめるその場所に生えているペニスは、知っているものと違った。明らかに、数が一本多い。

私が凝視すると、アグニ様は不思議そうに首をかしげた。

「どうした？　珍しいものでもないだろう」

「な……なんで、二本あるんですか……？」

そう、アグニ様の下半身から生えているペニスのような物体は一本ではなく、二本だった。

私が知る限り。男性のペニスは一本のはず。なのにアグニ様のそれは二又みたいに二本に分かれている。

「ん？　蛇族は皆こうだぞ。人間は違うのか？」

「人間は……一本だけです……」

驚きのあまり呆然としてしまう。蛇のペニスなんて見たことがないけど、まさか二本あるんだろうか。二本も使って一体何をするつもりなんだろう。

「そうか。まあ、我々も使うのは基本的に一本だけなんだが……人間相手なら、色々楽しみ方があるな」

……絶対いやらしいことをされる。

「ほら、ナギサはどっちのペニスが欲しいんだ？」

にゅるにゅるとペニスをアソコの穴に擦り付けられる。力を入れたら、すぐにでも入ってしまいそうだ。

「や、やだぁっ……いやっ、そんなの入らないっ……」

二本を交互に擦り付けられる。二つとも今にも穴に滑り込んでしまいそうでヒヤヒヤする。

「あ、ああっ……」

「二本いっぺんに挿れてやろうか？」
私はブンブンと首を横に振った。ただでさえ大きなペニスなのに、二本もいっぺんに入るわけがない。第一私は処女だ。そんなもの無理矢理挿れたら裂けてしまう。
「そんなに嫌がるな。だが……初めてだからな、最初は優しくしてやる。これからずっと子供を産んでもらわなければならないんだからな」
「んあっ♡♡」
片方のペニスがぐじゅん！　と奥に入り込む。
「いやっ♡やだぁっ♡」
「こら、射精するまで抜いたら駄目だぞ」
「んあっ♡だめ♡アグニ様、おちんちん抜いてぇっ♡♡」

ぱつぱつに張り詰めたペニスが一番奥で止まる。あまりにもキツくて、少しでも動いたら裂けてしまいそうだ。

「やだ……アグニ様ぁ……お腹、苦しいの……♡」

「んー？　まだ一本しか入れてないのにもういっぱいなのか？　仕方ないな、少しずつ広げるか」

「はうっ♡♡」

ず……っとペニスが動き始める。ゆっくりとした動きで、一番奥と一番手前を行ったり来たりしながら私のナカを広げていく。

――――こんなに苦しいのに、二本なんて入るわけないっ♡♡

「あ……？」

じわりとナカに何かが滲んだ。アグニ様のペニスの先っぽから何か温かいものが噴射された。おかしい。さっきよりもナカが緩くなった気がする。まだそんなに入れていないのに。

「お前のココに毒を仕込んだ。俺の毒は体液にも染み込んでいるからな。これが一番手っ取り早い。すぐに楽になる」

ぐっと奥に押し込む。さっきよりも簡単に、ペニスがするんと奥に滑り込む。

「あ、やだ……♡おちんちんがさっきより奥に……っ♡」

「ナギサは可愛いな……っ奥を突くたび……ココが、ぎゅうぎゅう締め付けてくるっ……」

毒が回ってるのか体が動かない。アグニ様が私の奥を突くたびに体が痺れていく。頭がクラクラしておかしくなりそうだ。

どちゅん♡どちゅん♡♡ずぷっ♡♡ぐちゅんっ♡♡

「ふ……っこんないやらし顔をして、毒がよく効いているようだな」
「あんっ♡ああん♡♡気持ちいい♡無理矢理なのに♡おちんちん気持ちいいの♡おかしくなっちゃう♡♡」
「ああ……気持ちいい……気持ちいいぞ……っナカがこんなにぬるぬるして……っ私のペニスが食いちぎられてしまいそうだっ……」
アグニ様は夢中になっているのか、腰をカクカク動かしながら恍惚をした。私とアグニ様の結合部から一定のリズムで水音が鳴る。
「……っ、ナギサ……そろそろ射精するぞっ」
「あっ……いやぁぁっ♡やだ♡だめ♡♡射精いや♡♡赤ちゃんできちゃう♡♡妊娠しちゃうのやだっ♡♡」
「この期に及んで……っお前は、一番最初に俺の子供を産むんだっ……孕めっ！　俺の子を孕むんだっ♡」

ずちゅん♡ぐちゅん♡ぐぽっ♡♡

「んぁぁぁあ〜〜〜〜〜〜♡♡」

プシャッ♡シャアアアア……♡

奥で何かが弾けた。熱いものが奥に流れ込んでいく。私の子宮の中にアグニ様の精液が注がれているのが分かる。

「だめぇ……♡そんなに、射精したら……♡」

「そうだなぁ、一本だけでは不確実だ。二本入れて射精してやろう。そうすれば確実に孕むだろう」

私のナカに収まっていたペニスが引き抜かれる。アグニ様はそそり立ったまま手持ち無沙汰になっていたもう片方のペニスと二本束にすると、私の秘部の入り口に擦り付けた。

「だ……だめ……そんなの入らない……っ」

「そんなことはないぞ。お前のココはすでに俺の毒で犯されている。簡単に広がるはずだ」

ぐ、と二本を押し付ける。言った通り、痛みもなくペニスが中へと入り込んでいく。

――――――いやぁ……っおちんちん二本いっぺんに挿れられてる……っ♡♡

絶対に入らないはずの場所に、ペニスが二本も挿さっている。あまりに卑猥な光景に、頭がクラクラした。

「ほーら、入った。俺の毒のおかげでずいぶんいやらしいおまんこになったな？」

二本挿れたまま、再びピストンが始まる。大きなペニスが二本挿さったまま、私のアソコに出入りしている。あり得ない光景だ。

けれど毒のせいなのか、体液のせいなのか、そう思う思考すらも鈍り始めていた。

「あううっ♡おちんちん♡おちんちんいっぱい入ってるの♡♡こんなに入れたらガバガバになっちゃうのに♡♡」
「そうだぞ？　こうやって広げないと、産卵しにくいだろう」
「――――さ……ん、らん……？」
「ナギサのおまんこの穴から、卵を産むんだ」
ペニスがずぼっ♡♡と奥に叩きつけられる。
「〝ん〟〝おっ♡♡」
「蛇族は一度にたくさんの卵を生むんだ。ナギサも、俺の卵を産んでもらう」
「いやあっ♡そんなっ♡わたし、人間なのにっ♡♡卵なんて産めない♡♡」
「過去の異邦人は何百個も産んだと聞くぞ。ナギサは三人分だからな。それよりも多くなるだろう」
ぱちゅん♡ぐちゅん♡ずぽっ♡ぐぽっ♡♡ぷしゃっ♡♡